

Alice M. Bacon と怪談牡丹燈籠

——“The Peony Lantern” に見る世紀転換期の
アメリカ知識人——

砂田 恵理加

目 次

はじめに アリス・ベーコンと「日本の民話」

(1) アリス・ベーコンとふたつの牡丹燈籠

センチメンタル・フィクション
(2) 感 傷 小 説の系譜：「同情すべき」日本人と日米関係

(3) 医学を学ぶ会津武士

(4) この幸せな死の意味するもの

はじめに アリス・ベーコンと「日本の民話」

明治時代に延べ三年余りを日本で過ごし、教師として日本の女子教育に貢献したアメリカ人女性、アリス・メイベル・ベーコン（Alice Mabel Bacon: 1858-1918）は、日本に関する著作を生涯で三冊発表している。一作目の *Japanese Girls and Women*（1891）は、英語で書かれた最も信頼のおける日本女性論だという評判をとり、版を重ねた¹⁾。これに続く *A Japanese Interior*（1893）は彼女が日本滞在中に綴った手紙を基にしたもので、こちらも好評を博し増刷されている²⁾。これらに比べ、唯一のフィクションであり、最後の著作ともなった日本の民話集、*In the Land of the Gods*（1905）は、一定の読者を獲得したものの、さほど大きな注目を集めることはなかった³⁾。商業的に成功したと言えない *In the Land of the Gods* だが、ここには前二作ではっきりと書かれな

かったベーコンの複雑な心情が表現されている。

本論ではこの短編集の一作、落語や歌舞伎の舞台で現在でも良く知られている「怪談牡丹燈籠」を基にした“The Peony Lantern”を分析する⁴⁾。ベーコンは *In the Land of the Gods* の前書きの中で、この本に収められた話のほとんどは「単なる民話」だと明記しているが、具体的な舞台設定や詳細に練られた人物像、その細やかな心理描写などを見ると、どれも口承で伝えられてきたような伝統的な民話とは様相が異なることが分かる⁵⁾。当時すでにラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn: 1850-1904) が、日本の民話を基にアメリカで数々の著作を発表していたが、ベーコンの日本の民話集はそれらとも性格を異にしている。彼女も編集に関わったある日本の雑誌は、*In the Land of the Gods* を「この十種の怪談は決して在来の日本に伝わるものの翻訳ではなく、日本人民間に流布する神仏の利益、狐狸談等の思想を骨子として、著者の新意匠を以って original stories としたしたのである」と述べた上で、ハーンが1904年に出版した怪奇談集 *Kwaidan* と比較し、「これぞ up-to-date の ghost stories で、Lafcadio Hearn’s “Kwaidan” の如き古くさい話の翻訳ではないのである」と紹介している⁶⁾。

事実、ハーンの怪談の多くが昔の日本の出来事として書かれるのに対し、ベーコンが *In the Land of the Gods* で語った民話は、すべて同時代の明治の日本を舞台にした物語だった。全十篇のうち少なくとも二話はこの本の出版数ヶ月前に終戦をむかえた日露戦争に関するもので、その他は狐狸に化かされる話、不思議な運命でめぐり合う男女の話、母親の愛情が不思議な力を帯び、子供を守る話などで構成されている。すべての話に近代的な理論や科学では説明のつかない不思議が登場するが、彼女の描く超自然現象に不気味さや悪意は感じられない。神仏は人の願いをかなえ、狐狸は人を驚かしたとても傷つけることなく、幽霊は祟らず、優しく人に寄り添う。本論ではこうした本全体の傾向に目をくばりつつ、八話目の“The Peony Lantern”に注目する。特にこの一話に焦点を当てるのは、この作品は他の物語と異なりその出典が明らかで、原作との比較対照が可能だからだ。後述するように、この話はベーコンが明治期

を代表する落語家の三遊亭円朝 (1839-1900) の代表作、『怪談牡丹燈籠』の速記本を日本人を介して参照し、英語の短編に書き直したものである。原作に加えられた変更点を確認し、その意義を当時の日米社会の文脈に照らし合わせて考察していきたい。

ベーコンの生きた19世紀後半から20世紀初頭のアメリカでは、幽霊が登場する短編が多数出版されていた⁷⁾。工業化、産業化が進み、急速に社会や思想が変化する時代に生きた当時の人々にとって、幽霊の話は「不安定に変化する現在に過去をつなぎとめておく手段を提示していた」とマイケル・コックスと R. A. ギルバートは説明する⁸⁾。また近年のフェミニズム文学論は、社会的な権力を獲得し難い地位に置かれた当時の女性作家や読者たちが、幽霊や超自然現象に高い関心をよせていたことを指摘し、欧米の幽霊譚を近代女性文学の中に位置づけようとしている⁹⁾。ベーコンの牡丹燈籠の怪談は明らかにこうした文学的な流れを汲みつつも、当時の流行の範囲に収まりきれない要素を多分に含んでいる。ベーコンの個人史とその時代背景、文学様式、物語の枠組みや細部を検討することで、彼女がこの短編を通じて表現しようとしていたことを考えたい。

本論の第一節では、まずベーコンのおいたちと、日本との個人的な関わりを紹介する。その上で、円朝の『怪談牡丹燈籠』と“The Peony Lantern”の筋を概観し、ベーコンが原作に加えた大きな変更点を確認する。第二節ではこの短編が日本の怪談を下敷きにしながら、19世紀半ばのアメリカで女性に広く読まれた感傷小説センチメンタル・フィクションの様式を採り入れている点を指摘する。アメリカの読者になじみ深い物語展開をすることで、彼らが日本人の登場人物に感情移入しやすいような構成になっているが、それは当時のアメリカでどのような意味があったのだろうか。第三節では、より詳しく登場人物の性格や背景を分析していく。特に主人公である“Teichi Ogiwara” (漢字表記は不明だが、以降「荻原貞一」とする) の士族という立場、出身藩の意味を、彼の悪友である“Komura” (以降「小村」と表記する) との対比のなかで考える。四節ではこの短編の最終場面に描かれた主人公の死の描写に注目し、ベーコンがこの作品に込めた意図

をより詳しく検討したい。

ベーコンの“The Peony Lantern”は、明治の日本を舞台に日本人を主人公にした幽霊譚だ。しかしこれを書いたベーコンは、単に日本文化をアメリカに紹介するためだけにこれを発表したのではなかった。この話は一人のアメリカ人女性の世界観の中で作り出されたフィクションであり、彼女の生きたアメリカ社会の一面に光を当てるものでもある。あるいは自らははっきりと認識していなかったかもしれない漠然とした意識を、ベーコンは日本のおとぎ話という媒体を通じて表現していた。“The Peony Lantern”の分析を通じて、世紀転換期に生きたあるアメリカ人の世界観を読み解いていきたい。

(1) アリス・ベーコンとふたつの牡丹燈籠

アリス・ベーコンは1858年、アメリカ合衆国コネチカット州ニューヘイヴンに生まれている。イエール大学があるニューヘイヴンは、当時からニューイングランドの知的、文化的中心地であった。ベーコン家は東部でも有名な知的エリート一族で、多くの学者や聖職者、医師を輩出している。アリスの父親のレナード・ベーコン (Leonard Bacon: 1802-1881) は会衆派の有力な牧師で、奴隷制廃止と黒人の地位向上を説いたことで知られていた。特に裕福だったとは言えないが、ベーコン家は多くの人々の尊敬と信頼をあつめる名家だった。二度の結婚を経験したレナード・ベーコンは14人の子供に恵まれた。アリスはレナードの最後の子供として生まれており、両親や歳の離れた兄や姉たちからは深い愛情を注がれて育ったようだ。自分の経歴を尋ねられた際、「私の人生で一番大切なできごとはベーコン家に生まれたことです。この私に何らかの価値があるとすれば、そればすばらしい両親に恵まれ、幼いころの環境が良かったからなのです」と答えている¹⁰⁾。

このアリスが一四歳のときに、ベーコン家は日本人留学生の山川捨松 (1860-1919) のホストファミリーとなる。岩倉使節団に連れられて1871年に渡米した山川は、五名の日本国初的女子留学生のうちの一人だった。当時12才だった山川は、日本に帰国するまでの11年間、一番年齢の近かったアリスとは姉妹の

ように育ったという¹¹⁾。

山川捨松は会津藩の家老の家に生まれた士族の娘だった。やや細かくなるが、“The Peony Lantern”の分析とも関わるので、ベーコンと日本を引き合わせた山川の出身背景をここで紹介しておく。山川家では捨松の父、山川尚江重固が捨松の生まれる前に亡くなっており、秀才の誉れ高く、「知恵山川」と呼ばれた長兄の大蔵（のちに浩と改名）が家督を相続していた¹²⁾。幕末の困難な政局の中、会津藩は京都守護職を務め、倒幕派との対立が決定的となった。周知のように会津藩は奥羽越藩同盟の中心となり、戊辰戦争を戦うが新政府軍に敗れる。明治政府の統治下で朝敵の汚名を着せられた会津の幕臣たちは、多くの辛酸を嘗めることとなった。

こうした苦難の年月の間、山川家は会津藩士の指導的役割を担い、まだ幼い捨松も家族と共に苦労を重ねていた¹³⁾。会津戦争中は大蔵が総督の責任を負い、軍事の采配を振るう一方、山川家の女性たちは鶴ヶ城（若松城）に籠城し、降伏するまでの一ヶ月あまりを率先して懸命に戦った¹⁴⁾。当時8歳だった捨松も家族と共に城に入り、弾丸が飛び交う中、「蔵から鉛の玉を運び出し、弾薬筒につめられたものを、又他の蔵へ運び込む」任務を負った¹⁵⁾。籠城中、大蔵の妻登勢は傷を負い、「脇腹から泉のように」血を流し、悶え苦しみながら19歳で死亡している¹⁶⁾。義姉の死を間近に見ていた捨松は、後に流暢な英語でその時のむごい様子と武家の誇りについてアメリカの雑誌社に語っている¹⁷⁾。このような山川の幼少期の凄惨な体験と、極限の状態でも損なわれない武家の責任感については、ベーコンも繰り返し聞かされていたことだろう。主著 *Japanese Girls and Women* では、幼い山川が懷に自害用の小刀を忍ばせ、籠城戦の中、懸命に責務を果たした経験を武家の精神を象徴する話として紹介し、本論でとりあげる“The Peony Lantern”にも会津侍を登場させている¹⁸⁾。

山川に加え、彼女を通じて知り合った他の日本人女子留学生、津田梅子（1864-1929）らとの出会いが、生涯尽きることのない日本に対する関心と親愛の情とをベーコンに抱かせた。1888年から一年間、こうした友人たちの勧めに

従い華族女学校の講師として日本に滞在し、1900年には女性のための高等教育機関を創設する津田を助けるために再来日している¹⁹⁾。親友の山川は帰国後に大山巖（1842-1916）陸軍卿夫人となっており、津田も近代女子教育の第一人者となったので、ベーコンは彼女たちを介して日本の社交界や教育界と強いつながりを持ち、外国人では普通見ることができない日本社会の側面を観察することができたと述べている²⁰⁾。この経験を生かし、前述した日本女性論や日本滞在記を英語で出版し、1905年に *In the Land of the Gods* を書き上げた時には、アメリカではすでに日本の専門家として知られていた²¹⁾。

ベーコンは1884年に三遊亭円朝が出版した『怪談牡丹燈籠』の速記本を基に、*In the Land of the Gods* の八番目の物語、“The Peony Lantern”を書いた²²⁾。牡丹燈籠の話は、中国明朝の文人、瞿佑（^{くゆう}1341-1427）の短編小説集『^{せん}剪燈新話』の一話、「牡丹燈記」に端を発する怪談を下敷きにしている。これが日本に伝えられると翻案され、さまざまな形で日本文学に受容されていった。江戸時代には、浅井了意（^{りようい}1612?-1691）が怪異小説集『伽婢子』（1666年）に「^{ぼたんのとうろう}牡丹燈籠」として取り入れたが、円朝の怪談はこの了意の話を参考に書かれたという²³⁾。円朝は日本でもよく知られたこの幽霊譚を練り直し、現在まで伝わる怪談の名作を作りあげた。了意が京都とした話の設定を江戸に変更し、数々の具体的な地名を織り込んだ点、主人公の男が後に亡霊として出てくる娘と生前に会う逸話、日本では脚が無いとされる幽霊が夜道に駒下駄の音を響かせてやって来る様子など、円朝に独特な語りの多くが“The Peony Lantern”に受け継がれており、ベーコンが円朝版の牡丹燈籠を参考にしたことを明らかにしている。

ベーコンは、1888年から翌年にかけて日本に滞在した際に円朝の「怪談牡丹燈籠」の落語を直接聴いた可能性があるし、1900年から02年にかけて再来日した際には円朝の噺を原作にした歌舞伎を見た可能性もある²⁴⁾。しかし“The Peony Lantern”に円朝の噺にあって歌舞伎では取り上げられない逸話が盛り込まれていることや、登場人物の名前の綴りから、彼女が主に『怪談牡丹燈籠』の速記本を参照してこの短編を書いたと判断できる²⁵⁾。

円朝は明治を代表する落語の名人だったが、噺家として優れているだけではなく時勢を読み自ら噺を作る才能があった²⁶⁾。円朝の『怪談牡丹燈籠』はいくつもの筋が複雑に絡み合う、因縁、敵討ちの物語で、落語にすると全21回にわたる長いものだった。演題に「怪談」とあるものの、ベーコンが“The Peony Lantern”に受け継いだ怪談はこの長い話のごく一部のみだ。ここではベーコンの話との比較のために、円朝の怪談部分だけを紹介する。

円朝の『牡丹燈籠』の舞台は18世紀半ばの江戸で、主人公は萩原新三郎という浪士である。この萩原と深い因縁でつながっているのが、旗本飯島家の美しい娘、露だ。露は父の妾との折り合いが悪く、牛込の自宅を離れ、米という忠義な女中と共に柳島の別邸で暮らしている。ここに出入りする医師が新三郎と露を引き合わせ、二人は互いに一目ぼれをするが、再会の機会がないまま、露は恋心を募らせるあまり病死してしまう。米も露の後を追うように死ぬ。露は幽霊となり、牡丹の飾りのついた燈籠を下げた米を伴い、夜な夜な根津に住む新三郎の元へ通うようになる。露が亡霊だということに気がつかない新三郎は、これを受け入れる。新三郎の身の回りの世話をしていた伴蔵が異変に気づき、ようやく彼も露が亡霊であることを認め、命の危険を感じ、易者や和尚の知恵を借りて家の戸口にお札を貼り、これ以上霊が訪れないようにする。しかしある夜、露と米の幽霊に百両もの金を積まれ請われた伴蔵は、お札をはずし、新三郎が身につけているお守りを盗んでしまう。この夜、露と米の亡霊が新三郎の元に現れる。一夜明けて伴蔵が寝所をのぞくと、新三郎はすでに亡き者となっていた。

この円朝の噺の舞台が江戸なのに対し、ベーコンの“The Peony Lantern”は明治時代の東京の話である。主人公の萩原貞一は士族の青年だ。より細かい変更については次節以降で詳しく述べるが、大筋だけを見れば、この二つの話にさほど大きな違いはない。ベーコンの話の登場人物の境遇も、ほぼ円朝版から受け継いだものだ。しかし、この二人の作者の幽霊の語り方には決定的な違いがある。その結果、同じ筋の二つの話はまるで違ったものになっている。

円朝は怪談噺の名手であったが、その醍醐味は怪奇現象が本当に何かの祟り

なのか、あるいは当事者の幻想や、怪異を装った人間の仕業なのかが明確にされない点にあった。これは文明開化が叫ばれた明治時代の世相と人々の心理を、円朝が巧みに反映させたものだったと思われる。円朝は『怪談牡丹燈籠』と並ぶ怪談の代表作、『真景 累ヶ淵』の冒頭で、「怪談ばなしと申すは近来大きに^{すた}廃りまして、余り^{せき}寄席で致す者もございません、と申すものは、幽霊と云うものは無い、全く神経病だと云うことになりましたから、怪談は開化先生方はお嫌いなさる事でございます」と述べ、近代化や科学のせいで怪談が語りにくくなったと、皮肉をこめて指摘している²⁷⁾。

明治の世になり、欧米先進国に追いつくべく、文明開化が叫ばれるようになると、それまでの日本では幽霊や祟りだと説明していた事象に、別の説明を与えるようになった。特に円朝が「開化先生」と揶揄するエリート層の間では、幽霊の存在を信じるような「迷信」が民衆の開化を妨げるという理由で否定されるようになった²⁸⁾。この風潮を巧みに取り込んだ円朝の怪談は、新時代における幽霊現象の不確実さを反映している。実は古典的怪談とされる『牡丹燈籠』でも、荻原新三郎が死んだのは本当に幽霊が現れて取り憑いたからなのか、あるいは実は悪党だった下男^{ともぞう}の伴蔵に謀殺されたからなのかが明確にされない。伴蔵^{ともぞう}は噺の後半で、新三郎が幽霊に取り殺されたかのような死に方をしたのは「いろいろな訳があって皆なわっちがこしらえたこと」で、「わっちが荻原^{あばら}の肋を蹴って殺し」、用意しておいた人骨を死体の周りに並べ、「怪しい死にざまに見せかけ」たのだ、と告白する²⁹⁾。この円朝の噺を聞く聴衆は、幽霊の有無も伴蔵^{ともぞう}の殺人告白の真偽も確かめる術を持たない。伴蔵^{ともぞう}が恩ある主人を蹴り殺すというのは、唐突すぎるようにも思えるし、物語の全体を通してみれば辻褄があわない面もある。しかし明治という時代が、怪異を単純な不思議として語ることを許さず、円朝にこのような説明を付け加えさせたのだ。円朝は、幽霊の存在を一部疑問視するようになった新時代の意識をこの怪談に巧みに織り込んでいる。

一方、ペーコンの“The Peony Lantern”には下男^{ともぞう}の殺人告白にあたる場面は存在せず、幽霊の存在を否定する記述も一切ない。円朝が伴蔵^{ともぞう}を38歳として

いるのに対し、ベーコンの話の中で“Hanzo”と綴られる伴蔵^{はんぞう}は、年老いた忠義な召使である³⁰⁾。最後の場面で貞一は穏やかに微笑みながら死んでいるのをこの下男に発見されるが、その死の原因は、貞一自らが扉を開け、ヒロインの“O Tsuyu”こと“Iijima Tsuyu Ko”(以降、「お露」「飯島露子」と表記する)の亡霊を家に入れたからだと説明されている。ベーコンの話の中で幽霊は当然のように登場し、生きているものに強い影響を及ぼす存在として描かれている。

ベーコンは円朝の原作に依拠しつつも、円朝の新しさとは逆行するかのようには、幽霊によって主人公の死を説明しようとした。文明開化を推進する日本人エリート層が時代遅れと見なした幽霊譚に、近代化の一翼を担うために来日したアメリカ人教育者が魅せられたのは一見矛盾しているようでもある。しかし、円朝が当時の時代の気分や要求に合わせてさまざまな漸を練り直していったように、ベーコンもまた自分とアメリカの読者層の意識を反映した作品を書こうとしていた。ベーコンはこの作品を通じてどのような世界観を表現しようとしたのだろうか。次節では彼女がこの話を語る際に採用した文学的なスタイルについて考察することで、彼女の問題意識を探っていきたい。

センチメンタル・フィクション (2) 感傷小説の系譜：「同情すべき」日本人と日米関係

“The Peony Lantern”の登場人物の背景や、彼らの孤独感や悲しみを強調する書き方は、19世紀後半のアメリカで人気を博した感傷^{センチメンタル・フィクション}小説の流れを汲むものだ³¹⁾。女性読者に広く読まれた感傷^{センチメンタル・フィクション}小説には孤児や捨てられた子供、子供に先立たれた親、離散した家族が頻繁に登場するが、これは登場人物の悲しみや寂しさ描くことで、愛情や人のつながりの価値を確認しようとするものだった³²⁾。1850年に発表され、記録的なベストセラーとなった感傷^{センチメンタル・フィクション}小説の代表的作品、『広い広い世界』(The Wide Wide World)では主人公の少女、エレン・モンゴメリィが母と引き離され再会の願いも虚しく孤児となり、姉と慕う年上の友人アリスにも死に別れている³³⁾。愛する人々に先立たれ、「広い世界」に取り残された孤独感や悲しみを強調し、読者の感傷的

な感情を掻き立て涙を誘うこの手法は、他の多くの感傷小説^{センチメンタル・フィクション}でも繰り返された。“The Peony Lantern”の露が母を亡くしていることや、貞一が両親と死に別れているのは、こうした感傷小説^{センチメンタル・フィクション}の系譜に則ったものだと考えられる。ベーコンはアメリカ人のものとは明らかに違う日本人の日常を描写し、その他者性を強調しつつも、読者になじみのある語りの型を取り入れることで、彼らが登場人物に感情移入しやすい話を作り出している。

“The Peony Lantern”では露の母の死後、彼女の父が若い後妻を迎えたとされる。一方、主人公の貞一の両親は一年の間に次々と亡くなっている。彼らの境遇は円朝の原作に沿ったものだが、円朝がこれらを背景として一通り説明するだけなのに対し、ベーコンはここにそれ以上の意味を与える記述をしている。露の父が彼女を別邸に置いているのは、彼女とその義理の母と「二人の女がひとつの家に住むことはできない」からだだった。一方、貞一が素行の悪い小村と親交を深めたのは「(一人上京している息子貞一の) 大学での勉学の進行と、彼の手紙に現れた高い志」を喜んでくれていた両親を亡くし、その悲しみから立ち直ろうとしていた時だったと理由付けされている³⁴⁾。ベーコンは、家族との死別・離別という悲劇を背景に、露と貞一の孤独さ、親密な絆を渴望する気持ちを読者に伝えようとしている。

孤独な露と貞一は一目で惹かれあうが、その二人の絆も身分ある者が気軽に女性宅を訪れるべきではないという因習によって、後には露の死によって断たれてしまう。露に初めて会った後、小村とも疎遠になり家に引きこもりがちな貞一は、「悲しく、孤独なのだ」とその辛さを口にしている³⁵⁾。この後、露への恋心を募らせる貞一は、夢ともうつつともつかない状況で彼女に再会し、二人はお互いの気持ちを語り合う。露は「愛のしるし」として死んだ母親からもらった香箱の蓋を貞一に与える。自分は箱の身の方を手元に置き、蓋と身の二つで一体になる箱を分け合うことで変わらぬ愛を誓ったが、事実上これが貞一にとって露の形見の品となった³⁶⁾。

ジョアン・ドブソンは感傷小説^{センチメンタル・フィクション}に形見の品が頻繁に描かれることに注目し、こうしたものが「愛の記憶、離別の苦しみ、そして最終的な再会」を象

徴すると指摘している³⁷⁾。『広い広い世界』のエレンは離別の前に母親から聖書を買ひ与えられるし、奴隷制の悪を告発する性格を持ちながらも、
センチメンタル・フィクション
 感傷小説の文学的伝統の中に位置づけられる『アンクル・トムの小屋』(Uncle Tom's Cabin) では、死の床にある少女、エヴァが自分の髪を切り取らせ、天国での再会を約束しつつこれを形見として周囲の人々に分け与えている³⁸⁾。ベーコンの“The Peony Lantern”でも、香箱の蓋がこうした形見の品々と同様の役割を果たす。荻原が夢の中で露と再会し、香箱の蓋を与えられるくんだりには円朝の原作にも存在するが、円朝の断では香箱はこの場面にしか登場しない。それに対し、ベーコンは香箱を四つの異なる場面で描き、読者にその意義を印象づけようとしている。香箱そのものの描写も非常に細かい。貞一が受け取った蒔絵の香箱の蓋の表面は「磨きこまれて光っていたが、うっすらとかびのような染みが浮き出て」おり、「七つの秋の花」が描かれていた³⁹⁾。貞一はこれを「七生変わらぬ愛の誓い」だと理解し、自宅にもどってからも「気がふれた人のようにこの金の漆塗りの蓋を見つめ」る⁴⁰⁾。円朝の断で露の香箱の蓋が「秋野に虫の象眼入りの結構な品で」とのみ説明され、その後新三郎がこれを取り出すこともないのと対照的だ⁴¹⁾。ベーコンの描写からは、香箱の蓋が「愛の記憶と離別の苦しみ」を象徴するセンチメンタル感傷的な思い入れを含んだ、単なる物以上の存在であることがわかる。

香箱は“The Peony Lantern”の最後の場面でも登場して、貞一の死に意味を与える。ここで貞一は、露が持っているはずの香箱の身と、自分がもらった蓋とをひとつに重ねたものを握り締め、息絶えている。ベーコンはこの場面に注釈をつけ、死者とともにその人が生前大切にしていたものを埋葬する日本の風習について説明をし、香箱は先に亡くなった露と一緒に墓に葬られたものであることを断わっている⁴²⁾。一度は分けられた香箱の身と蓋を指してベーコンは「二つの不死の愛の象徴がこれでふたたび一つになった」と述べ、多くの
センチメンタル・フィクション
 感傷小説で描かれた幸福な結末のように、露と貞一も死後の世界で再会することを示唆している。センチメンタル・フィクションドブソンの感傷小説の形見の品の定義と同様、ここで香箱は「最終的な再会への期待」を象徴するものとなっているのだ。

このようにベーコンの“The Peony Lantern”は円朝の怪談を基にしながらも、ヴィクトリア期のアメリカで広く読まれた感傷小説センチメンタル・フィクションの影響を強く受けている。ベーコンが*In the Land of the Gods*を出版した20世紀初頭には、すでにこうした小説の流行は下火になっていたが、彼女はあえてその様式を採用することで、日本をアメリカとは違う異質な国としつつも、日本人をアメリカ人と同様の感情を持つ人々として描くことを可能にした。

ベーコンが感傷小説センチメンタル・フィクションの様式に則った短編，“The Peony Lantern”をこの時期に発表したのは、彼女独自の親日広報戦略の一環だったとも考えられる。ベーコンが*In the Land of the Gods*の出版を計画していたのはちょうど日露戦争の只中、アメリカで日本・日本人に対する関心と反感が急速に高まった時期と重なる。当時の日米関係はおおむね良好であったものの、白人の国であるロシアと戦う日本人を「白人文明に脅威をもたらす異質な人々」として、非人間的な、理解不能な人種として描くアメリカの新聞・雑誌も多く、大衆レベルでは特に日系移民が多く住んだ西海岸を中心に反日感情が強まっていた。この戦争を契機として、日本人を筆頭に、アジア人を白人種に脅威を与える存在として敵視する人種論、いわゆる黄禍論が高まっていったのだ⁴³⁾。日本政府もこれを憂慮し、時の大統領セオドア・ルーズベルト（Theodore Roosevelt: 1858-1919）と既知の間柄である金子堅太郎（1853-1942）を開戦直後からアメリカに送り込み、黄禍論を封じ込め、対日世論を好転させるための広報活動にあたらせていたほどだった⁴⁴⁾。

こうした国際的な背景は、ベーコンにとって決して他人事ではなかった。親友捨松の夫、大山巖は満州軍総司令官として日露戦争に従軍していたし、捨松も日赤篤志看護婦人会や愛国婦人会の活動を通じ精力的に銃後を支えるとともに、日本の立場への国際的な理解を求め、欧米のメディアに寄稿したりインタビューに応じたりするなど独自の広報活動を行っていた⁴⁵⁾。捨松と頻繁に手紙をやり取りしていたアメリカのベーコンも、戦争中、日本の友人たちの手紙を元に親日感情を喚起するエッセイを発表し寄付金を募り、彼女ならではの方法でこれに協力していた⁴⁶⁾。しかし国際通で知られる森鷗外（1862-1922）が1904

年の時点で「日露の戦は今正に酣^{たけなわ}なり。而して我軍愈勝たば、黄禍の勢い愈加わるべし」と予言していたように、日露戦争で辛くも日本が勝利したことは欧米での日本に対する不信感をますます強めることとなる⁴⁷⁾。

親日家ベーコンは、好奇心と不信感が交錯する当時のアメリカ人の日本に対する関心を良く理解していた。*In the Land of the Gods* の前書きの中で、「この大戦争（日露戦争）を契機に、われわれは日本国民の生き様の、ひどく極端な面を目にするようになった」と述べ、当時戦争報道を通じて描かれていた日本人の姿が、欧米人の目に奇異なものとして映っていることを認めている⁴⁸⁾。そして、戦争直後にこの本を出版したのは、「わが国の人々が、太平洋を隔てた隣人に、より同情的な理解ができるよう、手助けできるかもしれない」と期待したからだと説明している⁴⁹⁾。

ここで言う日本人の「強烈な部分」、それは「天皇への七生の忠義の誓い」を「単なる誇張」にさせておかない、「日本民族の精神力」であるとベーコンは書く⁵⁰⁾。つまりベーコンは、アメリカのメディアでも驚異の念、やがては不信感をもって報じられた、天皇のために、国のために万歳三唱して次々と死んでいく日本兵士の精神性を「日本国民の強烈な部分」と表現しているものと思われる⁵¹⁾。

これに対し *In the Land of the Gods* の本文では、どの短編でもこうした「強烈な部分」は描かれぬ。むしろこの本で強調されるのは、幽霊や狐狸、神の遣いが登場したとしても、基本的には平凡で穏やかな日本の人々の毎日だ。先述のように、十編から成る本書のうちの二話では日露戦争を題材としているものの、どちらの物語の中でも焦点が当てられるのは戦地の兵士ではなく、彼らを送り出した日本の母や妻たちである⁵²⁾。ベーコンはこの本のいずれの短編でも、登場人物の日常生活を驚くほど詳細に書き込んでいる。これは人々がささやかな暮らしの中で経験する、ありふれた喜びや悲しみを描きだすことで、国境を超えて普遍的に理解されやすい人間らしさを強調し、読者の同情が日本人に向かいやすくするためだったと考えられる。

ベーコンが日露戦争中、日本人への「より同情的な理解」のために執筆した

In the Land of the Gods の中の一編, “The Peony Lantern” では、主人公である貞一が、当時のアメリカで広く理解された文学様式に乗っ取った、人間らしい感情を持つ、共感をよせるべき人物として描かれている。孤独さに沈み、愛の喜びに酔い、恋人の死を悼む貞一の姿を通じて、ベーコンは当時のアメリカで一般的に報道されていた日本人像に欠けていた人間的な部分を描き出し、アメリカ人読者の日本への同情を勝ち取ろうとしたと理解できる。

とはいえ、ベーコンは “The Peony Lantern” の登場人物すべてを「共感すべき人々」としたわけではない。次の節では登場人物の出自に目をくばり、具体的にどのような人々への同情をかきたてようとしたのかを考察したい。

(3) 医学を学ぶ会津武士

“The Peony Lantern” の貞一は父母を亡くしているが、円朝の新三郎と同様、生活に困らないだけの財産がある。ただし、田畑や長屋を貸し、その上がりで気ままに暮らす浪士の新三郎とは異なり、貞一は「愛する祖国の役にたつ人物になるように」勉強中の医学生だ⁵³⁾。根岸に住み、下男はんぞうの伴蔵とその妻 “Koma” が彼に仕えている。貞一は医学校の同級生、小村と親交を深めている。円朝の噺では山本志丈しじょうという医者が新三郎と露を引き会わせるが、ベーコンの話でその役割を果たすのはこの小村だ。平民の小村は経済的に苦勞しているので、そこそこの財産を持ち、高貴な生まれの貞一の友人になれたことを喜びつつ、この恵まれた青年に嫉妬もしている⁵⁴⁾。

小村に連れられ、貞一は、生前の露が忠実な女中の “O Kuni” (以降、国とする) と住んでいた深川の飯島家別邸を訪れる。小村はまだ医学生だが、国には「小村先生 (Dr. Komura)」と呼ばせ、医者を装い、以前から病弱な露の元に出入りしていた。小村は貞一のことも「荻原先生」と紹介して、客間に上がりこむ⁵⁵⁾。貞一と小村はその前に酒を飲んできており、酔いのまわった小村は言葉遣いが乱暴になり、しだいに紳士らしさを装うことが困難になってくる。「少しずつ、品の良い言葉や、良い育ちの人たちの交流の証である敬語を使わなく」なった小村は、困惑の表情をうかべる露と国にはおかまいなしに、「普

通、（露のような身分ある女性ではなく、）自分の知り合いの女性に使うような言葉遣いで、気安く、粗野に、そしてなれなれしく偉そうに」話を続ける。自分自身も酒に酔い、また露の美貌に見とれていた貞一はこれを傍観していたが、小村が酔いにまかせ、恐れおののく露の肩に手をかけると我に返り、その手首をつかみ、「やめろ、この犬！」と叫び付けた。「突如として、幼いころに受けた侍としての訓練が目をさまし」、「本当の貴婦人」である露を卑下した男から守ろうとするのだった⁵⁶⁾。貞一は抵抗する小村を露の家から引きずり出し、帰宅する。この後、貞一と小村は疎遠になる。露の家での小村と貞一のいさかいに当たる話は円朝の『牡丹燈籠』には描かれておらず、ベーコンの創作だと判断できる。

一般的感傷小説ではキリスト教的な善悪の観念が語られ、クリスチャンとしての美德に価値が置かれるのに対し、ベーコンは露を守ろうとする貞一の中から湧き上がる正義感を「侍としての」と表現している。彼女は他の場面でも貞一が侍にふさわしい徳と武力を身につけるべく、「先祖から脈々と受け継がれた厳しい伝統に則り育てられ」、「柔術や剣道、弓道、近代的な鉄砲の撃ち方まで父親の家で訓練されて」きたと書き、貞一が武士として成長したことを印象づけようとしている⁵⁷⁾。なお、ベーコンは一貫して“samurai”という言葉を使っており、明治期の士族と維新前の侍を区別していない。貞一が侍だということは、小村がしばしば平民である自分の出自と彼との差異に言及することでも強調されている⁵⁸⁾。

山川や津田ら士族出身の女性たちと親しかったベーコンは、侍たちの日本社会での指導的な役割を積極的に評価していた。別の著作では、明治日本を中世から近代へと導くのは士族階級の人々だとも述べている⁵⁹⁾。だが“The Peony Lantern”の貞一に、指導的役割を果たそうという気概は見られない。小村に「あくせく働いてつましく暮らすのは、俺のような平民にまかせておけよ……俺がどうやって金を使うのか見せてやろう」と誘われるままに、「昼夜となく、街のいかがわしい場所に出入り」し、「輝く瞳と黒髪、まばゆいばかりの着物に身を包んだ芸者」との放蕩に耽っている⁶⁰⁾。露の死を知れば感情を爆発さ

せ（それはこの作品を感傷小説らしくしている要因のひとつだが）、後は鬱々と家に引きこもるばかりだ。

貞一は品が良く、武芸にも優れているが、小村のような抜け目無い人物と比べると、愚直でいかにも世渡りが下手そうに見える。貞一は小村が僅か数ヶ月で、その「高い志を巧妙に吸い尽くし、この年下の純粋な青年を自分に近いレベルまで引き下げて」しまうことができるほど、感化されやすい人物だ⁶¹⁾。露の家での一件以来疎遠になった二人だが、やがて小村は露の死を告げに貞一の家を訪れる。この小村訪問の場面は五ページにも及ぶが、その間、貞一は小村の狡猾な言葉に翻弄され、怒り、泣き、懇願する。対する小村は、じらした拳句に露の死を告げ、悲嘆に暮れる貞一を見て、露の家で自分に恥をかかせた男に復讐を果たしたと、ひそかに満足の笑みを浮かべる⁶²⁾。貞一の涙は、小村の喜びとなるのだ。小村は自分の思わせぶりの言葉に怒った貞一を見て、彼の武力にこそ脅威を感じているものの、その士族としての権威に配慮する様子は見せない⁶³⁾。円朝の嘶にも医者が新三郎に露の死を告げに来るごく短い場面があるが、そこにはベーコンが描いた貞一と小村の間の緊張感は存在しない。

この小村と貞一の関係は、新興勢力の台頭と、旧指導者層の社会的な権威の失墜を象徴しているようでもある。小村は「生まれは卑しく、経済的資源も小さかった」が、「すばらしい秀才で、口も達者、（医学校では）同級生からも教員からも人気があり、楽しいことや自分の利益になることには、いつでも目ざとく関わろうと」する青年だ⁶⁴⁾。貞一が「おとなしい性質で、控えめ」でやや暗い人物であるのと対照的で、一緒に何か行動を起こすときには常に小村の方が指導権を握っている⁶⁵⁾。小村は幾度も貞一の高い身分に言及しているが、その身分の差がこの二人の力関係に影響を与えている様子はない。医学生として同じ学校で学ぶ同級生だが、やがては小村の方が社会で成功していくのではないかと予感させられる。

明治維新後、武家は士族という身分を保証されたが、周知のようにそれは名目的な性格が強く、家禄と共に特権の多くを失った。ベーコンは、主人公の貞一を医師を目指す上流武家の出の青年とすることで、実質上侍として生きてい

くことが難しい世相を描こうとしたと思われる。最初の著作である *Japanese Girls and Women* にも書くように、ベーコンは、士族が伝統的に「武士以外の生業はすべて卑しいものであると考えていた」にもかかわらず、維新後は「刀を捨て、以前は軽蔑していた仕事に就き、戦争の知識よりも平時を生き抜く術を身につける方が大切だということを認識」しなければならない状況にあるのを見ていた⁶⁶⁾。侍として厳しく育てられた貞一が医学生であること自体、伝統的な価値体系の変化を象徴していると言える。

さらに詳しく見れば、貞一は二重の意味で明治維新の敗者であったことが分かる。円朝は新三郎の出身地を明確にしていないが、ベーコンは貞一がもともと「城下町である若松 (the castle town of Wakamatsu)」出身で、数年前に東京に出てきたと書いている⁶⁷⁾。城下町の若松とは、山川捨松がベーコンに繰り返し語った会津若松のことだ。この短編に会津戦争についての言及はないが、貞一は士族の中でも、最後まで徳川体制を維持するために戦い、明治政府統治下では冷遇された会津藩の武家の出であるとされている。貞一は「愛する祖国の役にたつ人物になる」ため勉強しているが、その「愛する祖国」が明治国家のことなのか、会津のことなのか、または何か他のものを意味するのかは最後まではっきりしない。

貞一は個人的な事情で孤独であるだけではなく、明治の世の中で権威を失いつつある侍としても喪失感を抱える人物だった。さらに戊辰戦争の敗者である会津藩出身という背景は、その孤独さを一層強いものにしている。一般のアメリカ人読者に理解できたのは、愛する人々を亡くした貞一の悲しみだけだっただろう。しかしベーコンは、ここに明治期の士族の没落や会津の地位などの背景を織り込み、その孤独感や喪失感に一層の厚みを与えようとしている。彼女がこの怪談を通じて同情を向けようとしたのは、近代化のすすむ明治社会で権威や支配力を失っていく侍だった。小村の悪意に満ちたゆがんだ笑みとの対比の中で描かれる貞一の嘆きや、死んだ露を“spirit bride,”つまり「心の花嫁」、あるいは死後に結ばれるはずの「霊の花嫁」と呼び、一人位牌に供え物をする場面からは、ベーコンが貞一の悲しみと孤独さを強調し、彼への同情を

喚起しようとしていたことが分かる⁶⁸⁾。

(4) この幸せな死の意味するもの

女子教育を通じて日本を近代化するために来日したベーコンが、その近代に淘汰されつつある侍に心を寄せるのは皮肉でもある。没落する士族の孤独感を、愛する人を失う悲しみの中に隠すように書き込んだのも、ベーコンが少なくとも表面的には日本の「進歩」を祝福すべき立場にあったからではないか。この節では、貞一の死の場面の意味を考えつつ、侍に同情を寄せたベーコンの、一見矛盾しているようでもある意識を分析する。

没落する古い勢力に同情を寄せるベーコンの意識には、自分自身の社会での地位の変動が関係していると考えられる。ベーコンの生きた南北戦争後のアメリカは、工業化、産業化が急激に発展し、明治期の日本と同様、既存の価値観が大きく揺らいだ社会だったとされる。工業化に伴い移民が大量に流入し、都市部は肥大し、貧富の差が広がった。ベーコン家のような、古くから北東部で指導的役割を果たしてきた知的、そして宗教的エリート一族にとって、この変化は決して好ましいものではなかった。一部の者が巨万の富を築き新しい上流階級を形成し、人々の宗教観が変化するにつれ、旧来からのエリート層の社会的影響力が相対的に下がっていったからだ⁶⁹⁾。

名家の出身ではあったがそれほど裕福だったとは言えないベーコンは、このような社会の中である種の疎外感を持っていた。1896年、ベーコンはニューハンプシャー州ホルダーネスのスクラム・レイク湖畔に土地を買い求め、友人たちと夏をすごすためのキャンプを設立していた。1902年に二度目の日本滞在から帰国した後は、日本に関する執筆・講演活動に精力を傾けると共に、このキャンプの運営に熱心に取り組んだ。*In the Land of the Gods* の前書きの署名には、ホルダーネスという地名が添えられており、この本の執筆もキャンプ生活の中で行ったことが分かる。

ディープヘイヴンと名づけられたこのキャンプは、「世紀転換期の圧倒的な衝動から生まれ」たもので、「加速度的にあわただしくなる一方の毎日の中で、

失われつつある信仰心を支え」るため、自然の中に身を置く生活をするために作られた⁷⁰⁾。毎年このキャンプには北東部の知識階級の人々が「滞在費を払うお客」として招かれ、夏をすごした⁷¹⁾。ここでは、ベーコンの方針で、衣服、宿泊施設、食事、活動のすべてにおいて「簡素であること」、そして「変わらないこと」が重視された⁷²⁾。20世紀に入り自動車が使われる年代になっても、ベーコンはこれを好まず、キャンプへの乗り入れを禁じたという。文明の利器が、自分の聖域に侵入することを許さなかったのだ。晩年のベーコンのこうした選択は、急速に変化するアメリカ社会に対する批判であった。教育に情熱を傾け、日本の近代化に貢献したベーコンが、日本の伝統、とりわけ士族のあり方を高く評価したのも、このような近代に対する疎外感の表れでもあった。

ベーコンが“The Peony Lantern”で描いたのは、抜け目の無い新興勢力に圧倒され、孤独のうちにこの世から姿を消す旧来のエリートの姿だった。しかし彼女は、単にこの時代の敗者に対し人々の涙や同情心を誘い、消え行く過去へ哀悼の意を示そうとしたのではなかった。最後の場面で描かれる貞一の死は、単純な敗北を意味しているのではない。ベーコンは、明治日本社会で喪失感を抱えていた侍貞一を幸せな死に向かわせることで、現世での世俗的な成功を最上のものとし無い価値観を語ろうとしていた。

小村から露と国の死を聞いた数ヵ月後のお盆のある夜、貞一は露と国に再会する。驚く貞一に、国は露が父親から小村と結婚させられそうになり、これを嫌がり「逃げた」こと、そして今では国と一緒に「幸せ」に青山の小さな家で暮らしていることを説明する⁷³⁾。この時点で国も傍らの露もすでに死んでおり幽霊なのだが、貞一はそれに気づかず、露との再会を喜ぶ。翌日貞一は青山に露の家を探しに行き、迷い込んだ青山墓地で、前夜国が下げていた牡丹燈籠が供えられた、まだ新しい露の墓を見つける。貞一は、これが国の言った小さな家で、露と国がすでに死んでおり昨夜の二人は幽霊だったこと、そして「逃げる」という国の言葉が死を意味していたことを悟る⁷⁴⁾。この夜、露の亡霊が家の外から貞一を呼ぶと、彼は自ら雨戸を開け門を開き、亡霊たちを部屋に招き入れる。この後の幽霊と貞一の様子は書かれておらず、翌朝の場面になる。^{はん}

蔵が貞一の寝床を見ると、貞一は「ぐっすりと寝ていた。頭の上には牡丹燈籠がつるされており、その唇には微笑みが浮かんでいた。手には香箱を握り締めていた……貞一も、（露と）同じように逃げて、そして幸せになったのだ」とあり、ここで“The Peony Lantern”は終わっている⁷⁵⁾。「逃げて、幸せになる」は、死を意味するので、貞一が夜の間に死んだことが分かる。円朝の新三郎が下男伴蔵の裏切りにあい露の亡霊に家に入れ（あるいは伴蔵に蹴り殺され）、翌朝「虚空を掴み、歯を喰いしばり、面色土気色に変わり、よほどな苦しみをして死んだものごとく、その脇に髑髏^{どくろ}があつて、手とも覚しき骨が萩原の首ったまにかじりついており、あとは足の骨などがばらばらになって、床のうちに取り散らし」、世にも恐ろしい姿にとなり死んでいるのと対照的に、ベーコンは貞一が心穏やかに、幸せそうにあの世に旅立った様子を描いている⁷⁶⁾。

自殺ともとれるこの貞一の死の動機はあいまいで、その死因もはっきりとは書かれない。ベーコンは露の幽霊を家に迎え入れる時の貞一に「私も逃げて、あなたとあの小さな青山の家に住みたいのだ」とつぶやかせており、彼には霊を部屋に入れることで自分も死ぬことが分かっていたことを示唆している⁷⁷⁾。少なくとも小村と親交を結ぶ前の貞一は「愛する祖国」に身を捧げようと賢明に勉強していたのに、こうして突如として死に引き寄せられていく。死んだ恋人の後を追うのであれば、幽霊になった露に再会する前、小村に彼女の病死を聞かされた時点で死を選んででも良いはずなのに、そうもしていない。露の死は、貞一が死に向かうきっかけになったかもしれないが、積極的な動機とはなっていないのだ。

貞一が自らの死を意識したのは、露の墓を見つけ、彼女の「逃げて、幸せになった」という言葉の意味を理解した時だ。この時貞一は、「幸せな逃亡か」とつぶやき、「お露さん、私も逃げて、そして幸せにならないと！」と自分に言い聞かせている⁷⁸⁾。ここで貞一は露がすでに死んでいることだけではなく、死が辛い現実からの幸福な逃亡になりうることを悟ったのだ。そして自分自身も、侍として成長した自分が否定される社会、小村のような人々に軽んじら

れ、出し抜かれる社会から死をもって逃亡しようとした。

ベーコンの描く貞一の死は、多くの感傷小説で描かれる死と共通の要素を多分に含んでいる。こうした小説では、病床の人物が頻繁に「幸せ」を口にし、貞一のように微笑みを浮かべて死んでいく様子が描かれる。前述の『広い広い世界』では、死の床にあるアリスが「幸福ですか」と聞かれると、「ええ、まさに。これが私の望んでいたことなの」と返答し、「安らぎと満足の微笑み」をたたえ、息絶える⁷⁹⁾。同様に『アンクル・トムの小屋』では、白人にリンチされ虫の息の黒人奴隷トムが、「天国は（かつて住んでいた）ケンタッキーより良いところ」で、そこに向かう自分は「勝利を得た」のだと述べ、「微笑みと共に（永遠の）眠り」につく⁸⁰⁾。死を、勝利と喜びに満ちた神の元へと向かう第一歩であるとする死生観はキリスト教の思想に則ったものであるが、愛する人の霊に導かれ、微笑みを浮かべあの世へと旅立ったとすることで、仏教徒の貞一の死も、結果としてこうした価値観に沿う形で理解できるように配慮されている。また、自死とも取れる貞一の死の原因があいまいにされているのも、自殺を禁じたキリスト教の教えに配慮したものと考えられる。『アンクル・トムの小屋』が、黒人奴隷に同情を喚起するために執筆された感傷小説の形式に沿う小説であると同様、“The Peony Lantern”も、力を失い、孤独のうちに消え逝く武士である貞一への同情を読者の心にかきたてるよう計算されたものだ。

ベーコンは貞一の死を「幸せな逃亡」と表現することで、彼をこの世の敗者ではなく、あの世の勝者へと昇華している。アメリカ人読者に親しみのある感傷小説の伝統に則った、幸せな死の型を踏襲することで、ベーコンは貞一の存在意義を高めようとした。進みすぎた文明社会を拒み、俗世から離れ自然の中に居を構え、神の意志に沿う生活をしようとした晩年のベーコンに、生きにくくなった近代化の進む社会から「逃げて、幸せに」なろうとした貞一との共通項を見出すのは難しいことではない。

ベーコンは、複雑な対日感情が渦巻く世紀転換期のアメリカで、アメリカ人とは異質な生活習慣や信仰を持つ日本人々を描きながらも、読者の間に日本

人に対する共感や同情的な理解が生まれることを願い *In the Land of the Gods* を出版した。この中の“The Peony Lantern”に関して言えば、主人公の貞一が異なる文化や思想を持つ他者であっても、彼が時代の変化の中で抱えていた不安感・喪失感、そして「幸せな逃亡」という選択は、ベーコンや彼女と同じような立場の人々も共感を寄せることができるものだった。近代化への疑念が国境や文化を越えた連帯感を生み、同じような立場の人々の同情を喚起できると考えたのではないか。

近代化の一端を担ったベーコンは、進歩と呼ばれる社会のさまざまな変化を止めることができないことは分かっていた。だからこそ、貞一に幸せな死を与えることで、現世での利益を最上のものとしないう価値観を作り出そうとした。初期の著作では、日本の近代化を積極的に評価しようとしたベーコンだが、最後に出版した民話集では、消え行く古いものに価値を見だしている。ベーコンの数々の著作の中でも、“The Peony Lantern”には特にその傾向がはっきりと現れている。生涯を教育に捧げ、近代化に貢献しつつも、その近代のもたらず進歩に全幅の信頼を寄せることができなくなった晩年のベーコンの複雑な思いを、この英語で書かれた日本の怪談に見ることができる。

注

- 1) Alice Mabel Bacon, *Japanese Girls and Women* (Boston: Houghton, Mifflin and Company, 1891). なお、増補改定版が同出版社から1902年に出版されている。1902年版の邦訳は、アリス・M・ベーコン著、矢口祐人・砂田恵理加共訳『明治日本の女たち』（みすず書房、2003年）。
- 2) Alice Mabel Bacon, *A Japanese Interior* (Boston: Houghton, Mifflin and Company, 1893). アリス・M・ベーコン著、久野明子訳『華族女学校教師の見た明治日本の内側』（中央公論社、1994年）。
- 3) Alice Mabel Bacon, *In the Land of the Gods: Some Stories of Japan* (Boston: Houghton, Mifflin and Company, 1905). 以下、*ILG* と表記。
- 4) 「怪談牡丹燈籠」は江戸時代末にはすでに高座にかけられていたが、三遊亭円朝が新しい解釈を加え長編に練り直し、十八番としたため、明治期になってから人気が出た。この人気を受けて、三世河竹新七（1842-1901）が脚色をし、当時人気絶頂だった五代目尾上菊五郎（1844-1903）らにより歌舞伎でも演じられた。戸板康二「解

- 説：怪異談牡丹燈籠』『名作歌舞伎全集』第17巻（東京創元社，1971年），44-49。ラフカディオ・ハーンも「牡丹燈籠」を題材にした“A Passional Karma”を1899年に発表しているが、彼は菊五郎の舞台を見てこれを書いたとしている。Lafcadio Hearn, *In Ghostly Japan* (Boston: Little, Brown, and Company, 1899), 73-116.
- 5) Bacon, *ILG*, viii.
 - 6) 『英文新誌』第3巻，10号（1905年11月15日号），280。旧仮名遣いを改めて引用した。『英文新誌』は英文学や英語教育に関する雑誌で，東京の女子英学塾の教員が中心となり編集していた。*ILG* の紹介は Editor's Desk という巻末のコーナーでされており，編集責任者の桜井彦一郎（1872-1929）が書いたと推測できる。ここで言及されているハーンの本は，*ILG* と同じ出版社から発行された Lafcadio Hearn, *Kwaidan: Stories and Studies of Strange Things* (Boston: Houghton, Mifflin and Company, 1904) を指す。なお『英文新誌』には，*ILG* の10の物語のうち9話が注釈つきで掲載されている。“The Peony Lantern”は第3巻（1906年3月15日号），451-453；第3巻（1906年4月1日号），478-481；第3巻（1906年5月1日号），537-540；第3巻（1906年5月15日号），556-561の4回に分けて掲載された。本論に引用した *ILG* は，この注釈を参考に，筆者が原本を和訳したものである。
 - 7) Lynette Carpenter and Wendy K. Kolmar, eds., *Haunting the House of Fiction: Feminist Perspectives on Ghost Stories by American Women* (Knoxville: The University of Tennessee Press, 1991), 5. 近年は幽霊文学の新歴史主義的研究に加え，幽霊を社会的な文脈から考察する，幽霊の社会論とも言える研究が盛んに行われている。Renee Bergland, *The National Uncanny: Indian Ghosts and American Subject* (Hanover: Dartmouth College, University Press of New England, 2000) ; Kathleen Brogan, *Cultural Haunting: Ghost and Ethnicity in Recent American Literature* (Charlottesville: University Press of Virginia, 1998) ; Avery Gordon, *Ghostly Matters: Haunting and the Sociological Imagination* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1997) ; Judith Richardson, *Possessions: the History and Uses of Haunting in the Hudson Valley* (Cambridge: Harvard University Press, 2003) などを参照。
 - 8) Michael Cox and R.A. Gilbert, eds., *Victorian Ghost Stories: An Oxford Anthology* (New York: Oxford University Press, 1991), ix.
 - 9) Carpenter and Kolmar, 7-8.
 - 10) Alice Bacon to Miss Hobbs, 1 May 1889. Bacon papers, box 2., Hampton University Archives, Hampton, Virginia.
 - 11) 久野明子『鹿鳴館の貴婦人大山捨松——日本初の女子留学生』（中公文庫，1993年），107.
 - 12) 中村彰彦『逆風に生きる——山川家の兄弟』（角川書店，2000年），108.

- 13) 会津戦争中の山川家については、久野、33-58；中村5-128；星亮一『会津将軍 山川浩』（人物往来社、1994年）、9-94；星亮一『女たちの会津戦争』（平凡社新書、2006年）、46-55を参照した。
- 14) 鶴ヶ城籠城に際し、23歳だった大蔵は「会津藩始まって以来の若い総督」となっている。星『会津将軍』、79。
- 15) 阿達義雄『会津 鶴ヶ城の女たち』（歴史春秋社、1982年）、78。久野、34。
- 16) 阿達、71。これは、捨松の姉で当時一七歳だった操が後に『婦人世界』に語った言葉である。旧仮名遣いを改めて引用した。
- 17) 同上、78-80。久野、33-37。久野によると、この山川捨松のインタビューは、1904年に *Twentieth Century Home* に掲載された。
- 18) ベーコン『明治日本の女たち』、166-167。
- 19) 再来日の際、ベーコンは女子英学塾（後の津田塾大学）の設立に貢献した。
- 20) ベーコン『明治日本の女たち』、14。
- 21) またベーコンは、1907年に日本でベストセラーとなっていた桜井忠温（1879-1965）の日露戦争従軍記、『肉弾』の英語版の出版に編集者として関わった。ベーコンと同時期に女子英学塾で教鞭を取っていた忠温の兄の彦一郎が仲介したものと思われる。『肉弾』の英語版は、ベーコンが著作を出版していた、ボストンに拠点を置く Houghton, Mifflin and Company から出版されている。Tadayoshi Sakurai, lieutenant I. J. A., *Human bullets, a soldier's story of Port Arthur*, with an introduction by Count Okuma; tr. by Masujiro Honda, ed. by Alice Mabel Bacon (Boston: Houghton, Mifflin and Company, 1907)。
- 22) 円朝の「怪談牡丹燈籠」の速記本は、東京稗史出版会社から1884年7月から12月にかけて13分冊で発行された。歴史と文学の会編『江戸東京魔界紀行』（勉誠出版、2003年）、166。なお、円朝の口述をそのまま筆録したこの書は、日本における速記本の最初の例として知られている。
- 23) 牡丹燈籠の受容については以下を参照した。浅井了意著 江本裕校訂『伽婢子1』東洋文庫475（平凡社、1987年）；『伽婢子2』東洋文庫480（平凡社、1988年）；太刀川清『牡丹灯記の系譜』（勉誠社、1998年）；縄田一男『怪奇・怪談傑作集』（人物往来社、1997年）。
- 24) 円朝が最後に「怪談牡丹燈籠」を演じたのは、1899年10月、ベーコン再来日の約半年前のことである。また、東京歌舞伎座での『怪異談牡丹燈籠』初演は1892年7月14日で、以降夏に多く演じられた。戸板、44。
- 25) 例えばベーコンが“Hanzo”と綴る人物は、落語でも歌舞伎でも「伴蔵」と書いて「ともぞう」と読まれているし、彼女が“Ogiwara”と綴る主人公は、「荻原」と書いて「はぎわら」と発音されるべきものだ。ベーコンに円朝の本の解説した人物が原作とは違う読みを教えたのだと考えられる。

- 26) 円朝の怪談に関しては、横山泰子『江戸東京の怪談文化の成立と変遷——一九世紀を中心に』(風間書房, 1997年)を参照した。
- 27) 三遊亭円朝『真景累ヶ淵』(岩波文庫, 1956年), 5. 旧仮名遣いを改めた。円朝は幕末期から「累が淵後日の怪談」を演じていたが、明治になると「怪談」をはずし、「神経」をひねった「真景」という言葉を入れて、現在に伝わる形に練り直した。累の怪談は1690年(元禄三年)に書かれた勸化本『死霊解脱物語聞書』に実話として紹介された事件を基にしたものだ。無念のうちに人が切り捨てられたことから始まる怪奇・因縁の物語だが、円朝はここで、幽霊が出る(あるいは出たように見える)のは、それと遭遇した人の神経病のせいかもしれないと示唆している。高田衛「累の怪談」『幽霊の正体』別冊太陽: 日本のこころ98 (1997年夏号), 12.
- 28) ベーコンや円朝と同時期に活躍した日本人の知識人の中では、さまざまな怪奇現象に科学的な解説を加え、「迷信退治」をしようとした、仏教学者の井上円了(1858-1918)がよく知られている。円了は1896年にこうした研究をまとめ、『妖怪学講義』として出版した。
- 29) 三遊亭円朝『怪談牡丹燈籠・怪談乳房榎』(ちくま文庫, 1998年), 201-202.
- 30) 同上, 101.
- 31) センチメンタル・フィクション 感傷小説に関しては、特に以下の文献を参考にした。Nina Baym, *Woman's Fiction: A Guide to Novels by and about Women in America 1820-1870*, 2nd edition (Urbana: University of Illinois Press, 1993); Joanne Dobson, "Reclaiming Sentimental Literature," *American Literature*, 69 (1997): 263-288; Susan K. Harris, "'But is It Any Good?': Evaluating Nineteenth-Century American Women's Fiction," *American Literature*, 63 (1991): 41-61; Gillian Silverman, "Sympathy and Its Vicissitudes," *American Studies*, 43 (2002): 5-28; Jane Tompkins, *Sensational Designs: The Cultural Work of American Fiction, 1790-1860* (New York: Oxford University Press, 1985). センチメンタル・フィクション ベイムはこうした小説(彼女は感傷小説という言葉避け、女性小説と呼んでいる)の最盛期を1820年から1870年とするが、ドブソンが言うようにセンチメンタル・フィクション感傷小説の要素はそれ以降のアメリカ文学に影響を与え続けている。Baym, 13. Dobson, 284.
- 32) Dobson, 267.
- 33) Susan Warner, *The Wide Wide World*, Afterword by Jane Tompkins (New York: The Feminist Press at the City University of New York, 1987).
- 34) Bacon, *ILG*, 179, 172.
- 35) Ibid., 184.
- 36) Ibid., 190.
- 37) Dobson, 279.
- 38) Warner, 29-31. Harriet Beecher Stowe, *Uncle Tom's Cabin*, edited with an

Introduction and Notes by Jean Fagan Yellin (New York: Oxford University Press, 1998), 295-299. この小説は、1851年、雑誌 *The National Era* にれ連載された後、翌年に本として出版された。同書の感傷小説としての分析は、Tompkins, *Sensational Designs*, Chapter V “Sentimental Power: Uncle Tom’s Cabin and the Politics of Literary History” (122-146) を参照。

- 39) Bacon, *ILG*, 192.
- 40) Ibid., 192, 193.
- 41) 三遊亭『怪談牡丹燈籠・怪談乳房榎』, 43.
- 42) Bacon, *ILG*, 213.
- 43) 黄禍論については、飯倉章『イエロー・ペリルの神話——帝国日本と「黄禍」の逆説』(彩流社, 2004年); 市野川容孝「黄禍論と優生学」『編成されるナショナリズム』(岩波書店, 2002年): 119-165; ハインツ・ゴルヴィツァー著、瀬野文教訳『黄禍論とは何か』(草思社, 1999年); 橋川文三, 『黄禍物語』岩波現代文庫 (岩波書店, 2000年); Sidney Lewis Gulick, *The White Peril in the Far East: An Interpretation of the Significance of the Russo-Japanese War*, edited by Daniel A. Menteaux, (New York: Writers Club Press, 2003) (初版は1905年発行), を参照した。
- 44) 当時のアメリカでの金子の活動については、金子堅太郎講演・石塚正英編『日露戦争・日米外交秘録』(長崎出版刊, 1986年); 塩崎智『日露戦争もう一つの戦い——アメリカ世論を動かした五人の英語名人』(祥伝社新書, 2006年): 27-30, 82-94, 140-143; 村松正義『日露戦争と金子堅太郎——広報外交の研究』(新有堂, 1987年)。
- 45) 久野, 295-298. こうした妻の活動を知った満州の大山巖が, 「軍の機密が漏れはしないかと心配した」というほど、捨松は対アメリカ広報活動に力を入れていた。久野, 298.
- 46) 同上, 287-291.
- 47) 森林太郎「黄禍論梗概広告文」『鷗外全集』第38巻 (岩波書店, 1975年), 185. 例えば、日本でも『荒野の呼び声』(*The Call of the Wild*) で知られる作家のジャック・ロンドン (Jack London: 1876-1916) は、1910年に “The Unparalleled Invasion” と題する短編を発表している。1976年の未来の世界を舞台にしており、日本人と中国人の台頭により危機的状況に陥ったアメリカが、生物兵器で中国大陆の黄色人種を一掃するという SF 仕立ての物語になっている。この短編の中で、ロンドンは「1904年に起こった日露戦争」が黄色人種の台頭という危機を生み出す「論理的な始まり」であったと書く。*The Bodley Head Jack London*, edited and introduced by Arthur Calder-Marshall (London: The Bodley Head, 1963): 210-225, 211. また、人気作家のマーク・トゥエイン (Mark Twain: 1835-1910) は、

日露戦争を契機に、1905年ごろ、昆虫の世界で「黄色い」蜂の国と蝶の国が対立するという内容の、“The Fable of the Yellow Terror”を書いている。おとぎ話仕立ての短編だが、タイトルからも分かるように、白人種に対する黄禍を題材としている。Mark Twain, *Fables of Man*, edited with an introduction by John S. Tuckey (Berkeley: University of California Press, 1972): 425-429.

- 48) Bacon, *ILG*, vii.
- 49) Ibid., viii.
- 50) Ibid., vii-viii.
- 51) 例えば, “Supreme Sacrament of Japanese Soldiers: An Officer’s Account of How a Victory was Won; No one Expected to Live—Colonel Told His Men to Leave Their Bones on the Field—Last Words were Banzais.” *New York Times*, 23 June 1905.
- 52) 拙稿, 「Alice Bacon の *In the Land of the Gods* にみる日本像——『おとぎ話』が語る日露戦争」『アメリカ研究』35 (日本アメリカ学会, 2001): 155-165では, *In the Land of the Gods* の中でも特に日露戦争に言及する二話を取り上げ, ペーコンがこの時期にどのような形で戦争を描いたか, そしてそこにどのような意味があったのかを分析した。
- 53) Bacon, *ILG*, 172.
- 54) 貞一や露が名前で呼ばれているのに対し, 小村は姓のみしか明かされない。当時アメリカ人の間で一番知られていた「小村」は, 日露戦争終結の際, ポーツマス講和会議の全権大使となった小村寿太郎 (1855-1911) であろう。小村寿太郎は学業に優れた秀才で, 飢肥藩出身の士族であるものの, 借財を抱え, ペーコンの描く小村と同様経済的には恵まれず, 「大酒し, 女遊びも激し」かったという。吉村昭『ポーツマスの旗——外相・小村寿太郎』(新潮社, 1978年), 43. ペーコンがどの程度小村寿太郎のことを意識していたのかを知るすべはないが, この名は円朝の原作に使われておらず, 彼女が何らかの意図をもって登場させたものと言える。
- 55) Bacon, *ILG*, 179-180.
- 56) Ibid., 182-183.
- 57) Ibid., 172, 195.
- 58) Ibid., 173, 195.
- 59) ペーコン『明治日本の女たち』, 158.
- 60) Bacon, *ILG*, 173, 175.
- 61) Ibid., 173.
- 62) Ibid., 193-198.
- 63) Ibid., 195.
- 64) Ibid., 172-173.

- 65) Ibid., 173.
- 66) ベーコン『明治日本の女たち』, 162.
- 67) Bacon, *ILG*, 172.
- 68) Ibid., 196, 200.
- 69) T. J. Jackson Lears, *No Place of Grace : Antimodernism and the Transformation of American Culture, 1880-1920*, rev., ed. (Chicago : University of Chicago Press, 1994), 4-58.
- 70) Megan Thorn, *Roots and Recollections : A Century of Rockywold-Deephaven Camps* (Holderness, NH : Rockywold-Deephaven Camps, Inc., 1997), 22.
- 71) 英文学者の本田増次郎（1865-1925）によると、1905年8月、このキャンプには北東部の都市からやってきた「上流のばかり」の人々、40人あまりが滞在していた。『英文新誌』第3巻（1905年10月1日号）, 193.
- 72) Thorn, 29.
- 73) Bacon, *ILG*, 204.
- 74) Ibid., 210. 円朝の話では、死んだ露は谷中の新幡随院に葬られているが、ベーコンはこれを1872年に開設された青山墓地に書き改めている。
- 75) Ibid., 213.
- 76) 三遊亭『怪談牡丹燈籠・怪談乳房榎』, 174.
- 77) Bacon, *ILG*, 212.
- 78) Ibid., 210.
- 79) Warner, 440-441.
- 80) Stowe, 426-427.